中村俊定文庫
文庫 18
126

墨吉物語

上下合綴

青流撰

墨吉物語序

とありかたりの集杯の樹の枝しけく竹の林の葉のすくなからすみる人のまなしりむつかしけなり古人曰六朝の文さま〳〵変体かはりきたれることとく異の中に同あり因の中に異ありしるやあるしらすやある今此一部片楮にして所々の人の句をならへいるかむはせは似て情ひとつならすひとつならぬ情にくて宇宙の大觀そなはれりその景色朝ゆふに見れはさそあれと

中庶のすみよし物語と弾ぜてはたれかし
かあめるそ竹堂の青流子なり序するも
のは北水浪士のなにかし

豊嶺蔵書

勝事

帝国図書館蔵書

墨吉物語　上

中　秋

芋はゝまつ月をとるもあはれ哉　宗因

名月や女中物まねすからす　元順

雲おりゝ人やすますする月見哉　芭蕉

名月に芦の葉黄なり汐の上　大坂　才磨

はしめて堺に入し年の

名月や沖て直のたつ浦の鯛　青流

此ちゝへあをきを月の衣紋哉　大坂　半隠

名月やあそふにも月のかしこまり　日文十

中村俊定文庫

名月や狸になつて腹つゝみ　日　文丸
めい月や小脇にはさむ小鼓　日　舞興

萬里氣九清

名月や後せぬ人もおましり　日　その女

立秋

初秋や朝の夜から襲もときく　元梅

七夕

おもへたゝ硯あらひの後の恥　江戸　峯白
彦星の一口つゝもうき名かな　大坂　扣推
織女や何そのしろき御簾の中　その女

星まつり簾にさぶる衣の音　由仙
七夕に出来あはせけりはしり早稲　青流

題穀板　一接

星合や臺に時たる稈の中　才磨
盆栗の穂に出て星の逢夜かな　才磨

中元

曽祖父やうときもけふの玉祭　大坂　一禮
折箸や苧からそろはぬ束の霧　日　籽郎
うら盆や八百屋真々栗の賣納め　摂津　和田　香水
おくり火や一里きゝて鐘の聲　紀州　和歌山　順水

送り火に焼そくるゑかな　藝良廣島　和用

燈も書はすけなし　玉まつり　伊豫松山　黄山

おくり火の捨所まゐ北人かな　水月

また宵の名にはまりたる盆の闇　大坂　芝柏

近付もその夜はかりの躍かな　李堂

また夏の心て躍るおとり哉　伊勢四日市　可習

若衆も踊くつれて坊主かな　如風

おとりこや渡しの舟の夕あらし　青流

糸萩はむすほれものよ軒の妻　大坂　雲晴

しら萩のあるや襖の骨しはり　日　石丈

家毋七十　寄蕣賀

あさかほの星と一度にめてたけれ　江戸　素堂

あさかほの花にみとれて晝寝哉　大津尼　智月

蕣や秋の雫にしてそたつ事　備前　雲鹿

あさかほや根はそのまゝ栄螺から　江州小室　如風

あさかほやいはら植たる垣に近　尾州名古屋　慰水

ひらゝと稲妻つたふ柳かな　葉文

いなつまのまとふ一本榎かな　那山　一露

室津にて

稲妻や何して船の遅なはる　松山　白海

いなつまはとちらむきてもみられけり　備前　風山

蛍うつ柳の一葉〳〵かな　伊勢　琴友

芋の葉も撓みし露のおもみ哉　伊予大洲　自鍬

冥露やふりほとかれしつる縄　大坂　盤水

にげなしや馬糞に肥る女郎花　河内布忍　安求

朝霧や海になかる〳〵山の裾　岸和田　来水

晝みれは哀にもなすきり〳〵す　感々

すみよし（詣てたてまつりける）

亀聲もみな松虫はみとりかな　大坂　半陰

蟷螂やかまくちたつる甘柘榴　山笑

虫の音や夜更てしつむ石の中　日　その女

末なりの越似ほそし秋の風　大津　東明

みたれ居る萩はしからぬ陣かな　遊汀

とりひろけとこやらしまる薄哉　大坂　香水

なり平を雑見とかめてすき哉　西堂

蓮の実の飛てまつぱる明茶かな　高野山　利廣

わせの香やそうて袂にそのうつり　大坂　嵐竹

町内の新酒ひろめや口ふきき　日　之道

唖の子の物いひ出る花野かな　渭川

息災に牛もはたらく花野哉　李堂

那堪竹一軒
この竹に山から来たり朝と暮　青流

安立町にて
銭持て唐からし買ふ草の花　才麿
秋風のかほとに鮎の痩にけり　松瑞　縣草
櫻榴芭蕉風に替りはなかりけり　河内安忍　林
老母艸の実水白うして石青し　八尾　毎雄

我躬
なりひさこ鈍て世にある例かな　大坂　補天

元禄三年七月十八日いせの神にまゐて

水萱近只におもはぬ太山かな　才麿
旅衆のやすんて居間のきぬた哉　讃岐　その女
手の内の豆おもひやれさよきぬた
うつ衣哥の拍子はなかりけり　大坂　芳水
棚なもの片つけてうつきぬた哉　岸和田　流残
猫の子の尻手へまはる砧かな　細石
気のくさる涙の机にきぬたかな　尚竹
碓ふみ家を見えて通りけり　青流
野分せし跡の手淳や踏かふり　由仙
落鮎の砂に醉たる野分かな　元登
青流

ひかれても跡からけやし綿の桃　墨吉
月にとはむ穴の光の澄ところ　竜野　青竹
月落て葉に音からぬ芭蕉かな　名　春色

旅中

踏まよひ栗山ふは人のはしめ哉　元宗
猪追ふや夜ゝのかゝしのともちから　青流
傘をかたけて秋の彼岸かな　同
唐綱に袖ぬれてきく鶉哉　勝所　正秀
青橘柑けふこの比のさむさかな　東明
山ふかみ尼か紅さす龍田雲　廣重　仲

山家にとまりて

火になりて猶おそろしや栗のいか　伊予松山　戯楓
紫栗やすり落する風の音　枕肌
團栗よ笠はまたいら丸　折　感々
とんくりに奇はよまぬか源三位　香水
法師をつくやそろはぬ星の奇　呂圭
杉菌は庭の蓼の山哉　閑也
問てから蓼には有す藍の花　大坂　猶而
秋風や一倍くせの物いはす　渭川
朝寒やたはこに向ふ懐手　由仙

秋とは、返変すらん嵯峨の人　水殘
恨（き人なし秋の置火燈　大坂　鵝動
秋のよや寝られぬまゝに身用心　呂圭
夜さむさやきすゑたてなる魚荷宿　嵐竹

田家秋

秋の夜や風やむかたに川の音　渭川
地膚子の照かげる（き紅葉かな　青流
水木とは紅葉してこそ知にけり　イヨ　隅亀
山姫の紅葉しいるゝ深谷かな　半隠
とをのいて詠す（たる紅葉哉　京　助叟

鹿の音や角のあらほと哀也　伊予大洲　白猿

重九

雉子やきの豆腐夜に入菊の月　渭川
たまさかに我宿の菊なまくさし　萬海
濱菊や蜑にたつねてけふの花　墨吉　竹端

市中吟

菊の香に行あたりけり朝ぼらけ　侃樂
うつむくや蒲萄かもとのけふの菊　亢宗
けふとてや一路か簡のきくの花　青流
けふの菊中稲の食のうまみかな　才麿

綿つゝ一臥やさし菊の花　藝州広島　里洞

添竹や花の腰のす　翁州　坐井

朝〳〵は先髪結ぬ菊圃　平戸　荊口

赤かれと折は黄菊の匂ひかな　定平

縁石や土まで寒し菊の花　半隠

琴箱や古物棚の背戸の菊　芭蕉

住吉の市に立てそのもとり長谷川畦止亭に

おの〳〵月を見侍るに　芭蕉

舟買て分別かぼる月見かな

秋のあら〳〵に魚苅つれたる　畦止

家のある野は苅あとに花咲て　惟然

いつもの辻にこのむ中服　洒堂

頃日となりて土用をらかね　文考

榎の木の枝をおろし過たり　之道

溝川につけをとく筌をゆてみる　青流

火のとぼつたる亭のつきあけ　蕉

蓋とれは桃のうとんの冷返り　之

坂下りてから一里程来る　然

照つけて仲もしほる牛の糞　堂

名

村の出見世に集て寐る　孝
嫁とりは女斗て埒をあけ　蕉
大事かる子の秋の霜やけ　流
汁の実を又呼かへす朝の月　道之
薄の中へ蠟のはひ込　堂
籾ふせてそれからあそぶ花の陰　孝
おりく〳〵たへぬ春の旅人　堂
暖に濱の紫師も明ひろけ　然
しろし見分て返す茶筵　蕉
めつきりと油の相場あかりけり　流

又とこ〳〵やら羽織着て行　道
名をよろうみせたとて樽着　堂
竹橋かく〳〵山川の末　孝
大根も細根になりて秋寒し　蕉
若狭恋〳〵月のさやけさ　然
やるされて寐れは目かすむ夜ゝよ　之
半造作てまつ障子はる　堂
気短に針立ふいと帰らる、　道
地のしめるほと時雨ふり出す　流
雌の此中〳〵せて一羽鶏　蕉

ふり商に棹さけてゆく　道流

船入をあちに住なす三井の鐘

枯た薪を沢山に焚　考堂

人々の庇もすはらぬ花盛

岡のけつれを雑子うつるく　然

鹿苑院義満公わすれ艸を慎守のなにかしに

尋させ給ふにその色香をうつはものゝものかたり

につたへしいま又流る住吉物語をあつむこの色を

いかにやや

忘草とは、や秋の家の集　元梅

この名月もまた舟て出る　青流

啼鶏羽風に砂をこほし来て　滑川

哭はつしたる朝の茶の水　梅流

黒〳〵と酒切の賛の二くたり

御用に帔屋を寐たり起たり

手にとれは圃に風もそよ〳〵と　梅川

心あてなるそこて傘かる　流

ありふれた文てはいかぬ物おもひ　川

切者めけとも琵琶の伝合す　梅

色にけふの座形をとゝのめ
鑿も字になる番匠名ゝ
班鳩（イカルガ）は町片側て今もある
塵ふき立て秋の来るなり
稲妻に二日の月のまきれ入
霧もはつ〳〵と川舟をひく
藪垣に亭つき出して花盛
桃の使に男添やる
長老の道外られなる春の酒
旅のはしめに大津繪をみる

名

流川梅流川梅流川梅流川梅流

鮫さへひたく水に寒かりて
師走の梅のりんと咲出す
ならぬ手をおて世間にかはらす
与八か舞にわるい癖あり
みるものに上すりなる戯をして
喧嘩のあとに談合のふす
袈裟衣沼津屏風の埒もなし
畫のほめきをさます薄月
笛ほとに川幅ほそくなれ行
草縫に替て米をいたく

川梅流川梅流川梅流川

ウ

朝くらに若宮殿をふしおがみ　梅川流
山を元隨てこすき出さるゝ　川流
うつすりと平場に雪の降わたし　梅流
尾髪そけたつ馬に狩衣　川流
まつ春は一重の花にとつきて
種ののこりの芹あらひそス　流

三吟

酒買に羽織着て出る月夜哉　青流
垣の一重に鶏頭色つく　李堂

ウ

申酉の野分も吹すしつまりて　元宗流
子も半役に大工旅する　流堂
寐入近いつも寒き雪の中　宗宗
罠の羽白のとれて荷作る　流流
若衆に逢首尾ありてむつまし　堂堂
さてもめつたにきるゝ　剃刀
あかるかとのそいてみれは降てる　宗宗
りちきに花のつくくそら　支流
一まいに畫絹はしる肌繻半　堂堂
藥師せはめて家中あつまる　宗宗

此たひも木曽て炉ふ便きく　流
師走めきたる月の雲行　堂
歌母子の食は精に会入て　宗
今度の嫁は村の笑もの　流
花のある方に明たる窓の数　堂
茜いろよくそまるかゆろふ　宗
鶯の啼は弥生に雪の降ル　流
米不自由なる順の掌入　堂
かり初に買て取たる古色帷　宗
伊賀に親ある女氣おもき　流

莨の葉を蚊のまなひに鈍て宜　堂
町の中もく川きれいなり　宗
朝晩の寒さにこまる薄ぎれ　流
寸白もては艾たやさぬ　堂
丁寧に待めてたくりすりて　宗
使か来れは自身飛出る　流
鶏の畠をせーる月のくれ　堂
この秋中は京てたてけり　宗
肌寒み智恵ある者の責にさ　流
かいてのく程何もよろしなる　堂

ウ

る

ひつた物普請の繪図を取て置　宗流

かたうきくこむ禪のはしくれ　宗堂

から風に砂ありあくるる花の陰

雲雀の聲も一はつみなり

後月

宿もよし旅は沼津の十三夜　洒堂

風浪や紅葉よせたる後の月　渭川

芦の穂を豆に苅こむ月見かな　東明

雲も降る時雨もすゑや二夜月　由仙

後の月詠入ほとさむさかな　江戸　李堂

一葉落いくらもおちて月夜哉　嵐雪

訪竹堂青流士幽居　三句

ふゝかとてひつんて通る竹の月　大坂　之道

秋寒し聲の幅あり濱千鳥　岸紫

しら露のしろくたけしや竹の堂　加賀　安求

池島成之は吹出すや野分の朝と名たかし又

元順風をよくならせしもたゞ有明の時鳥とと

めしらこの地も誹の光なく園をたとる斗

なりしに青流子此浦に流をとゞめるの源を

きよふす一日竹戸をたゝきて

この浦もちの身すからや旅の穐　サヌキ　吟墨

ある日青流子をたづね呂圭にいさなはれて

戎島の高亭にあそぶ日夕浪にゝき素影

かきりなし

俤に月をはらむや鮸のうす　才麿

岩の薄のわかる苦汐　呂圭

松に係ふ岡のほろせのあからみて　青流

小鳥の筋に塗立をする　麿

虚鞘の瓦のほりたる腰ふさけ　圭

見へたとほりに律義ぎきたつ　流

青流子にまかりて

行秋を竹て持たる襖かな　芝柏

木の中に松そ目に立秋の暮　元梅

秋もはやふるきく柱のとうかうし　大坂　何中

旅懐

この秋は何で年よる雲に鳥　芭蕉

九月晦

長月を懸かねさゝに別かな　その女

冬

雲しれぬ時雨をしらは鳥の聲　大坂　晴嵐

住よしのまつくれと暮るまて　之道

近江路を河内柴につゝ時雨哉　渭川

裏道の竹の葉しろきしくれ哉　光宗

猫の子の膝にあそぶやさよ時雨　李堂

時雨るや物なつかしき丁子屋　嵐竹

通天のもみじもはやちりすくるにやとりし

方丈のふるひを養る時雨かな　如枫

辛さきや泊りあはせて初しくれ　正統

相傘のわかれさま憂しくれかな　日　竹水

物買へともてなす棚の時雨哉　廣島　亀板

遠山の松のあすかの一しくれ　日　治忠

御廚を榎におかむ時雨哉　岸留　細石

奥賣の魚籠かつくしくれかな　河内清水　赤白

行道に傘を干しくれかな　嚴島　仲品

笠とれは六甲白の時雨かな　その女

人足や見せし時の一時雨　半隠

夜はしりの舟は沖の時雨哉　青流

蒼海や千鳥のさはく流星　大坂　雲哺

行船に寝ながら聞し千鳥哉　坐井

十月の比はねむたき鳴るかな　松山　賜草

目のさめる夜るのかきりや水火燵　何中

老らくの手の跡くろむ火桶哉　竹端

宿かりや荷はれなから置こたつ　光竹

張火桶みしや小町か寺の切　利廣

孫ともに引よせてをく火桶かな

貪家へ見出す冬のころもかへ　鶴山田　青竹

圓居　崔風

埋火をかけしにけり酢醤油　由仙

おこされて火燵寝直るさきかな　如枫

ふり髪に霜の置けり火津馬　盛水

世をさけて床に歌かく霜よかな　感々

頤の髪撫てゐるしもよかな　香水

戸明れは雀灯をけす霜夜哉　細石

夜咄を羽織につむ霜よかな　廣島　一軽

灯の葉の青きを冬の日なた哉　松山　風皆

笹一重霜の見へすく日脚哉　桃花

朝月やまろく見えたる冬木立　清水　葉文

やとり木は結句葉かあり冬木立　来白

蔭葉して名の付かける月の亭　　田城　可明

鶴そなく枯野につゝく白畠　　松推

枯田にも男ひとりはたてりけり　　雲鹿

里犬や枯野へあとを襲ありき　　広島　才麿

さびーくて又とをりよき枯野哉　　日里洞

おもはすも念佛を申かれ野かな　　親之

冷ーや枯野にのこる桔槔　　安林

馬しかる聲も枯野に流かな　　膳所　曲翠

いそかーや脚もやすめぬ冬の雲　　その女

冬かれのすゝきや小野の炭俵　　七歌　之

炭やきや曉の清水鼻をみる　　江戸　其角

すみやきや狩場の八幡の片相手　　青流

炭かまや羽ぬくもりて飛ぶ鴉　　半隠

すみよーにまゐて、

稲宜たちや火鉢ひとつをとり廻し　　青流

木からしにつつと入たり夜這星　　呂圭

こからしに鳥ふかれゆく夕哉　　杏　鬼啟

木からしにもみ合するや鹿の角　　元梅

木枯に神めぐく楠の千枝かな　　半隠

ふからしやつきてなかる猿の聲　　ろみ女

冬之竹　三句

木からしは竹ばかくれて一つまりぬ　芭蕉

こがらしや竹もよなみを吹てゆく　之道

木枯やふかれて竹のゆり違へ　青流

笠はみな脱てかきたる濱千鳥　渭川

雨雲やかれる柳に鳩か啼　石丈

冬霧の立さはいたる月夜哉　東明

川音に菖蒲團の下のさむさかな　舞巾（イセ）

ふくけやあかつき利のかゝり花　その女

さゝなから心さゝなるふくと汁　李堂

つたなさよ根深に氷る霧の玉　弘卿（イセ）

歩せ時は人に馴たる鴉かな　自鍬

杭の聲嵩しきにあたる冬野哉　元梅

蹟さゝて跟たかるさむさかな　尚竹

用のある耳出してをく頭巾哉　土芳（伊賀）

芭蕉翁たまゝなにはの芦の花みんとてきく

月にくたりたまふにおもはすも夢とのみ浮雲

むなしくはかなきならひなり一日吟席のちは

余も病床にゐ侍りしに之道かるとゝかくと
しらせたり胸つかれ筆とるまもなくて

是は扨呂き、わたる冬の雁　青流

追悼

翁の句のはしをおもひとりて

なてしこの花もやつるゝ火桶哉　同

寒さうな笠さ（みれはなみたかな　その女

雪

酒のみて猿にかもゝ似るやき礫　才麿

雪は茶に茶は雪にゐつる詠哉　閑也

降たつや腰たけ雪の小松原　香水

ふる雪や入日にそまる海のうへ　侃樂

宴をまゐらせて

雪のよや猫我門の馬さくら　松岳　銀杏

笠なけて海に雪みむかゝり舩　鳶　和用

大雪や馬取ともは瓦かゝけ　大洲　信清

雪にけさ襖より顔の半かな　日　幽暮

かゝれ家や犬のゐる雪の奥　灌菊子

初雪を見に来て庵の朝茶哉　如枫

青流子をたつねて

あはち島手かとく也雪の窓　河内木本　一鎮

雪の日やあをきはとくさ斗也　備前　風山

しろき手やよこれめつかぬ雪こかし　流残

有徳なる宿や牡丹に雪かゝる　舞雲

三〻人の雪も得おさ〻すの杓　鵜動

禁足

おもひやれかくもよこれぬ袋の底　芳水

幾由旬澄のぼるらん冬の月　大洲　白猿

山茶華やすけなからに宮の腸　岚竹

讀テ帰田録ヲ有リ感

口切やけふ酒あり〻てけふの醉　青流

歌仙

小食にとりあふ竹の湯漬哉　竹端

つゝけてあれは雪も飽きる　青流

この浦も島のおほさに暮過て　青竹

もらひかけたる家か埒あく　端

膳立も時分はつれて暮の月　流

石てはたし〻新藁の音　竹

秋の風舟からあかる出影象　端

ウ

人そはへして刀ひねくる　流
このころはとこへとつく山かない　竹
温飩とゝへは押かけて来る　端
なまずにてなられぬ物は佛之　流
年もあかぬに障のいちくち　竹
あたまから盃かへてのみたかり　端
ふつと見しより寐言にもしゝ　流
おんもりと蒲團の下に文かある　竹
戸棚の鈴は腰をはなさぬ　端
月花に手を畫たる童の餅　流

山吹時は宇治か図にのる　竹
春先の仕支もらへはつかはれて　端
笠の上なる袋おとさぬ　流
朝晩に渡り馴たる間の河　竹
地にあるものかゝも八石　端
とれみても病なきるの腹の形り　流
金の鳥居に泊りさゝやく　竹
こむにやくに気を持せなるぬた　端
ほそい目もとか大臈のはし　流
物入に隅なる屏風を引廻し　竹

ふるひらゝかおしい酒ゆゑ　端流

なゝ力に僧都のわせてたんまりと　竹

中山道の月も　二　三度　端

ウ

この秋は高て思案もしめて置　流

薄あつてのたとへものなり　竹

めつらしい肴でいつもてなされ　端

屋根のすゝみに毛氈をしく　竹

花なれや西にみはらす海の色　端

あかき衣裳に神一の苗代　竹流

偶興　その女

うきて行雲の寄さや矢の月　嵐竹

られて千鳥に寝覚幾度　青流

飽はかり心に銀を持てみて　女

ひらき格子に中戸かためる　竹

鮭の出てけふは朝から酒に成ん　流

草にさらりと露をもてなす

有馬忍性法師賛

有馬山やまゐしるき艸庵ひとりの僧あり衣

一くはんの尺八竹みしかうかるゝとりをきて一

笹屋の食一瓢の飲ういたころはのふり天
さへた音や竹のきりよのたまりやせぬ　宗因

徒子府

山かきしくれ降雨にそひて時〳〵雷のいとさ
むく肌は栗をおこす今幸に汝かたすけを得
たり口鼻は俊を守りておこすおり〳〵は小つ
る餃子のきようをつらすといへともしみて心を
とめすおほくはすりきり隠逸のうつはものと
なりぬたかく人にましはるまとなく平生やす
きをたのしみ石巣か富をねかはす利休か
茶にもあはすこそ〳〵と世路をわたる哥書
羽織に和をとふとくし問もなく膝かしらす
やふる時はされに執をとめすたと〳〵火かつ
かふともまた川にはまらふともあゝ快かな

雪見月中句　泉南隠士書流

屋上雷

またゝく火あらす鳴来る雷かな　尾陽　横舟
初雪さらは重さをかけてみむ　由仙
傘にふたくひあたるあられかな　梅林

添寝して子に起きく電かな　怨回

頭陀の身もやきめつうや賀茂紀　充宗

やませの水摺ゆけば氷かな　江戸　氷花

顔みせの衣脇衣冷しけさの雲　青流

冬至

紅の絵なく夕日影　才麿

袴着や子は鉄扇(イカヂチ)て三郎兵衛　信　青流

まかりてて水仙の葉のうら面　止水

猫の背の鏡にたつや冬かまへ　文丸

才麿彰宅に

居ぐらめてこや津の国の冬籠り　江戸　仙化

ねすまねも呂うつくしや冬こもり　雪堂

冬川や椿のひらく数の中　来水

悼浪花釣水士

その朝は梅をいけたり寒の水　充宗

尚雪彰宅

水瓶や庭かたまらぬ冬つばき　洒堂

寒聲や年に似合ぬ脇ながき　元登

煤拂に蓑着て後影の哀　七四日　晨笑

上はりにしてみるものも節子哉　可翁

極月は上半になりぬ電伸　松山　雪風

梅の木に誰すゝはきのはらへ箱　は　友正

さまくゝや藪鳴屋の年の暮　安求

臭の後みせたる師走かな　芝柏

春をまつ出入きれいや市の蝿　青流

さし込て時雨の亭の師走哉　一礼

ゆたかなる物は師走の豆腐かな　萬海

住吉物語　下

墨玄物語下

歳旦

金爐香殘り我鍋風も春明ぬ　大友惟中

雨もしに屏風立けり庭かまと　渭川

みとり子を頸巾てたかん花器　その女

霄羊と立や鶏の本鷺の本　江戸調和

初空やさくらの弥生蘭の穐　京知泉

我宿の歳旦うたへ白拍子　萬海

時鳥生よ初音の匂ひ鳥　盤水

立年の海の匂ひや濱つはき　何中

小鰐集雄かふとの葉を筆初　竹端
しらくに年玉つむや元方棚　呂圭

閑居の春をむかへて
梅折にあるきまはつて御慶哉　青流

早春
森一つ背中にさむき若菜哉　洒堂
いたゝくは土佐繪におほ若菜摘　里東
霞たつ空やなゝくに鳥のみち　鵜動
初硯きのふの禮を殘書　田仙
寶曳や袖のこけるも燒ほこり　侃樂

鳥追を呼ていはせよ中戸近　如風
から風にしらけてうやあさら武者　舞路
商人の空音ゆたかやいせの春　去來
月はなゝ書はかすむや昆陽の池　鬼貫
すゝしろや女子弁かむかひ合　由仙
鶯の飛出る谷のいはらかな　才磨
鶯や梅に小首をかたけゝる　之道
別丈考
鶯や瓦をもためす暇ふり　計徒
竹内一枝軒にて

世にゝほへ梅花一枝のみてさい　芭蕉

梅か香に空あかりなる藪の間　之道

人形の手地かはくや畑の梅　大坂その女

梅の香は別のおとなし治左衛門　往来

いてつき草鞋干けり背戸の梅　東明日

梅か香にちゝりの雉子や君かため　安永

いてつきし

舟くさき着物きかへて宿の梅　吟墨

ありてさて竹の中なる一重梅　充宗

梅ちるや川原鼠のちゝと鳴　青流

かくれ家や匂ひも梅のよわ腰　香水

蕚の子のとり立するや梅の花　宗竹

文の世に物しりとりふ花の兄　順水

付届け人むつましや梅のころ　渭川

芭蕉翁百ヶ日

わすれてはならぬ歎や月と梅　土芳

梅さくや日にゝなかき人の影　如枫

白魚や一重の梅の散とごろ　元梅

おもしろう山に穴あく霞かな　大洲古水

一禮耕月庵にて

青柳のかつらき伊駒麥畠　才麿

門さして留主とは見えぬ柳かな　江戸　百里

すまひ取の宿に植たる柳哉　仲呂

青柳や壁にぬりこむ丸鏡　青流

青柳や行器をはこぶ里はづれ　猫雨

湯気のたつぢんにやくつる柳哉　渭川

津守浦柳十六景之中

あたゝかに赤子ははする柳哉　尚竹

春風に時〳〵はつむ小松かな　雀風

すみよしの春や際たつ海の色　呂圭

山鳥の樵を化す雷間かな　イセ　文考

雪ふりやあそふ所て水になる　少年六才　盛太

笹苞や雪の白ひに苞の塔　白鋤

朝東風や人は歩やく帆懸舟　晴尚

ある庵へ花見に行くれて帰るた

ほそ聲よ人見うしなふ朧月　筑前甘水　良休

聲淺し畠の雉子の夕日影　青竹

手とゝきに雉子ほろおゝ藪の中　芳水

若鮎やうつゝ心に石の肌　青流

小桶より田螺の出る南夜哉　芝柏

二月や中の河内の雪送り　半隠
菜の花に野山かゝやく朝日哉　東明
鶏川のなかれはしめや花椿　安林
こほつへき埒に椿のさかりかな　李堂
嘶や夜るの椿にはなれ馬　鳥井水
ついへなる葉のうらにさく椿かな　由仙
わかれ路を吹てのきけり猫の恋　尚竹
燕子の巣のうちせはきさめこと　その女
初花の咲やおとすや鹿の角　岸堂
よしのにて

初花をみるや行春のさくら苗　利廣
かけろふや雛鼻血なる石の上　洒堂
たんぼや荒田に入る水の上　青流
初雷や蚕に小袖うちかくる　杭山　風皆
分もくや一足もとる麥うつら　大洲　白猿
絃かくや彼岸の中の朝仕事　如風
井の蛙空に鳴けり桔梗　岩田　潦水
風よせて蛤はこふ杭の中　宗宣
夕月や井手の屋形の小米花　一禮
春の日や磯のあらゝあさら貝　青流

からくと莫海鼠のけたや春の雨　文丸
はや暮ぬ棟造りはるあめ　文十
青池の上て降けりけるの雨　半隠
春雨にかかまぬ芦の若葉哉　その女
竹の内に越てよしのにまふするとて三句
春雨にけふも坂での思葉かな　渭川
春雨やきれとも笠に花すみれ　その女
鼻紙の間にしほるゝすみれかな　日
泉南青流子のやとりに
菊の芽のもてはやされし海辺哉　同

盃や蝶の粉すゝく吉野川　感ル
傘さして梨の花みる垣根かな　細石
別之道
細着る人見おくるや木瓜の花　許六
花
登ル高ニ
花鳥や竹より上をふかれ行　才麿
よし野にて
山伏の袈裟にかけてや峯の花　伏見　任口
夏立初のとしならにて二句

鹿ほとを都まさりや奈良の花　元順

奥や花おとろに残る紺の糸　元梅

吉野へ花見にまかりて

三よしのは櫻をおよく山路かな　香水

西行上人の庵の跡は苔清水の邊今に残りてなつかしけり

けり数寄の花の奇人なりけり　円

鶏や花くもりなる檜の上　里洞

花の香に物わすれする木陰かな　坐井

五畿内の花落合よみをつくし　雲鹿

花しろしそれも浮世の董州　友正

大判の花と咲たる一歩かな　流残

花の主名もなき者とこたへけり　大洲石丈

一宣つゝ花のいつめる覓かな　孤舟

山人や斧の柄やきし花の雪　今井毎將

散花を見て笑ぬる捨子かな　ヒロマ景林

戎島　蛭児宮奉納

花筏さすや空ゝ古のうしろ近　由紀

この彼岸まつるや花さかりよしのにて　李堂

先花にとりつく寺の酒はやし　渭川
もみ落す脚半の土や華の上　同
蒲團まく朝の寒さや花の雪　その女

送り蟹ヲ嘲い無ヲ酒

たの手扇はさむし花の陰　江戸　青流
散際は八重もさくらかな　大坂　立志
苔より櫻ちる夢みてさめぬ　大洲　伴自
前書をするまでもなき櫻かな　日　涂奇
賦の女も足をあらはん山さくら　風音
延紙の片苔におもき櫻かな　利廣

よ野い坊にやとりて

夜とゝもや櫻かゝの星の数　充宗
あけほのや淺黄櫻のあさがすみ　半隠
鹿垣やきのふみたる山櫻　元登
かけのぼる猫のわかさや影さくら　才麿
行燈にうけて庭のさくら哉　青流

上己

けつまつみて淡路島しる汐哉　閑也
すみゝにあそびて
杉市は大目坊主の汐干かな　安林

及橋や椿によする大汐干　我堂遊可

我孫子雅合十六景之中

敬中さす當屋か館をとり合　亢宗

川縁や柳にそふてもゝの華　来水

曲水や風にむかひて座直らひ　安求

ある年の春なにはの地をはなるゝに江南にる

人あてかれかすまねをかり物にてしはらく

腰かける品地す遠のせまきにうそあく

山ふきやはるの奥なるかし座鋪　青流

日ころむつまかりし人々別をおしみてあやし

の声をたきぎの句に和する人童山吹となむ

やまふきやものおしみせぬか座敷　その女

再和

山ふきや垣仕なをしてか座敷　才麿

やまふきや蛤かはんか座しき　渭川

やまふきやすもうとみれは借さしき　惟中

山ふきや西日うけたるか座敷　何中

やまふきや井の水もよきか座鋪　移郎

やま吹や像ふみおとすか座鋪　半隠

桃の日はなにかありける汐さかひ　由仙

物にかまはす柳芽をはる　素水

春延の荷とせんくりにより替て　青流

上も気根に早起をする　仙

月影の涼しのなりて雨かなひ　水

杉の板戸を蟻に仕くはす　流

ならはしに宇流の嫁入は毋て行　仙

外から見えぬなみたなりけり　水

正直は佛に落のない斗　流

名

物よろこひに餅の粉を挽　仙

ひよつと出に陽慰て居て將棋さす　水

いろつも状をひんねしてきく　流

めきゝと哭はやらかす龍糟　仙

延ひろけて赤紙をよる　水

連て来る家所の鳩まて春の月　流

気のかた病のいとい肌寒　仙

所化入を遣みてみせる花中　水

瑞路すゝし坂を一牧　流

より賣に牛のある俗も春暮て　仙

姪とひとつに手代仕付る　水
堅なもの横にもせずにおなくり　流
けふも今日とてそは秋にあふ　仙
ぬくめ樽本のいきりをかき廻し　水
きはめて聲の夜る礼に来る　流
きりのない寺の咄をきゝたがり　仙
麓の風呂へ腰ぬけを負ッ　水
傘てひつたと顔をかくさるゝ　流
てゝ〳〵らて惣かかなはぬ　仙
旅かけに度々伊勢の月をみる　水

名ウ
梨に坊主の名をつけて賣　流
押剌て躍の中もとりかけ　仙
内證客におろす暖簾　水
ぬけさせぬ奉加の金のあたるべし　流
朝日あとに袴はなさす　仙
長持に横ちらさはく花の陰　水
うちつきたる風ののとかさ　流

夏

けふすらそ袷ひとつに相口　半隠

時鳥また夜着入る蚊屋の中　大阪　東山

一聲やその魂さかすほとゝぎす　由仙

麥秋の夜なかにきかん郭公　里洞

鳴捨よひろい人はあり時鳥　香水

おりからや治童といねて時鳥　令風　皆

時鳥とはかりきけと安郎殿　自省

藪つゝきとりつく明て郭公　青竹

青流子をとひて鳴立澤のあとなとかたらひて　仙台

我鵑の聲君にせん時鳥　三千風

いせにて

卯花に伊勢の匂ひのけはひ哉　洒堂

卯花やちいさきうらの門構　吟墨

旅行

いてやこのさよは山なーかきつはた　李堂

澤蟹や栖にとまんかきつはた　細石

盆形りの池の面や杜若　半隱

船につむ牡丹の主や何の守　宗比

ちりはせて崩るゝ花の牡丹かな　葉文

牡丹折て母蓋となるわか身哉　白獅

襲の衣輪ゆふ門やけしの花　青流

八重一重稚のくるひやけしの花　各務可明

人々金かすみところに茅菴をしつらひ給ふに

晝寝してみせはや菴の若葉風　文仲

山おくのなをなつかしき若葉かな　渭川

蓉田八幡宮にて

夏木立みたてよ坊のかし座鋪　李堂

竹の子や五つもらふて客ひとり　青流

竹のこに山坂の土の崩れけり　その女

竹の子やおりからのこす枕蚊屋　舸隣

蕗摘す焙さかしけり夜るの雨　一礼

朝起の顔ふきさます青田哉　惟然

日の影や蚊屋のまたぬの恥かしし　坐井

艸の戸や佛の御手に麥ほこり　文丸

晝の蚊や聲も出さずに足の甲　音流

桐の木や花咲へくもおもはぬに　才麿

題ス青流亭ノ竹ニ

ゆるゝしてすこひぬ竹の孫子哉　惟中

贈ル竹堂青流移ン居ヲ泉南ニ殖ル宿舟ニ

千竹ヲ之句上　并小序

吾すむ浪速津の青流舟を誹諧にかたねわかうして

名あり漢の才和の智學ていつくし常に隠をこのむ
病ありて云いつる同もおほくはからひたり竹を愛する
癖ありて心おのつからかすかなりふとしこの夏いつみの
浦吹井より北住吉すは南堺の市に庵を得て
几をかさり硯の塵を吹て心に閑をたくはへ人詼諧に
とめりこの軒にまた竹を儲く竹深〆留客處とは
杜子か心也亦やまと哥にも君か代のなかきためしを竹
にたとへ契りあるうきふしのふしとも是に准ふ風雅な
を竹にあり外には義禮の節をなら人中には大道のま
ことをかくす金詼諧の情をを感するにとゝまる

一たび詼門をひらきて竹下に逕をもとめ人をあてした
しむ事久しからむとしかいふ
今の世の竹をそたてつ苔の花

狂六堂才麿

青流亭興行

鴨の巣や鯛うく比の堂か浦　才麿
竹の葉の一いきほひや風車　半隠
おなしく席に侍りて竹をふとふく
竹植て竹に鳴りけり夏の鳥　籾郎

青流の幽居にまかりて

蚊の聲もかまはぬ竹のあるしかな　釣水

夏座鋪しまりに竹を二三本　渭川

竹のこのひたつ赤の葉風かな　何中

青流子をたつねまかりけるに途中吟

家〳〵や干瓢むいて浦の風　惟然

哥仙につゝりぬ由仙か堺の海とゝる集に

くはゝるす筆をきゝ置

題青流吟十竹

日に植て庭のまゝとや竹の陰　同

すゝしさやたへずに吸す竹の下　由仙

智律師の席にて

吸すゝとおほくてさひしかんこ鳥　青流

端午

白粽芦の若葉をこもるすゝ　大坂 由平

芦田鶴の香を襲出す粽かな　京 言水

見にわくやあやめ甲に武者修行　万海

菖蒲湯や窓にうかゝる鐘の聲　由仙

朝戸出に顔をなつるやあやめ艸　東明

兵も今日晴かまゝ帝のほゝ　素琴

男にも巻ならはせよ笹ちまき　伊大洲　古水

鶏啼窃なつかしやこし粽　江戸　青流

花あやめ謝てあらむ菰菖蒲　一晶

薬玉に猫うつくしき小綱かな　安求

青梅や簾の中の物おもひ　元梅

五月雨に胡桃かたまる山路かな　その女

石臼に子も這かゝる五月雨　和枫

さみたれや土石に向ふにほひ墨　流残

夜の明るさかいは白し五月雨　マツ山　正統

五月雨うしろ前なき葵かな　梅林

二三日蚊屋のにほひや五月闇　ユウ中　浪化

横雲のおき所なや黴雨日　和　岱竹

葉も薄くうふもや竹の若盛　半隠

夏草によらてや池の糸すゝき　青流

夢藁の上ふむ里の五月かな　渭川

人種の継目を見する田植かな　閑也

大津馬も一つれにかゝるに草津を日の

ちり〳〵に過て

名残は神鳴杭のほたるかな　呉圭

持綱や夜ゝは雨にたゝれす　由仙

かたひらや智恵かがいにて紅うこん　大坂　風各

畫寐してかたひら置や腹の上　来水

蠅打を腰にさいたる住居かな　舞興

夏むせや蛙の声も一しつみ　元梅

家うちに人なき門の蚊遣かな　青流

里の子よ掛籠に飽ぬ心もて　才麿

萍の花見ありくやこまい虫　東明

池水に蟹のとわたるぬなは哉　元登

紫陽草や涼しうなれは門(出る)　由仙

夏海や是は矢橋の渡し舟　元宗

寫や六月かけて杉の中　渭川

二日の日茶屋て逢けり氷室守　感々

飛蝶や草のあつさに池の上　青流

簫吹人笛主とはかほる蓮かな　西鶴

すみよしの蓮見に朝とくまかりしに雨はれて

蓮の香の行わたりたる風かな　青流

蓮池の花の肩ぬく膚かな　元梅

はすの葉も皆膚かりぬ一夜酒　盤水

風なきに荷葉うごくは石かめか　鵜動

水の気や荷葉の丸き菱の角　桃十

山桜のあからむ藪のにほひかな　之道
野中やうらうらとして蛙の声　竹端
我もさそかくれ行らんさくら麻　風皆
何骨のつかりたり水をはなれたり　由仙
蛭の血のなかるゝ肺を芝のうへ　渭川
青月に鳴や草葉のきり〳〵す　充宗
乞食や蚊屋つり草をかゝ竹　柳尤
里の子よ腹慰せぬか雲の峯　細石
きのふとは又半替りや雲のみね　青流
輪違の暖簾かゝる清水かな　その女

ひとりつゝ木の根をつる清水かな　雲風
あたらしき魚賣家の清水かな　江戸堂勝
晝顔の花見にさかれ比叡法師　何中
なてしこに漸ふきさす朝かな　元登
敷藁の上にそいつる仏の夢　元梅
姫仏や京へのぼせて眉つくる　尚竹
初仏やころりと籠にうつくしき　知誰
おもしろや仏に網おかつら川　石丈
夕立や木もなき山の嶋かくれ　由仙
わふたちや陳ありきはぬれなから　雲林

夕たちや髪の結目のぬれもせぬ　水月
ねふたちや笠にたまらぬすゝの夏　元嘉
大夜着のそばに寐にけり土用干　大坂 椿子
下繪にもよしや草葉よなら團　阿知 顕成

遊女

物おもふ暮や黄色なぬり團　才麿

妓童

うつくしく角を持たる扇かな　同
祇園會や簾の中の咳の音　青竹
物賣に旅の座敷のあつさかな　その女

雲に雲おほひ重るあつさかな　京 之道
夕歌を無理にまけたる塩ぬかな　路通
ねふかほに煙とりしまふすゝみかな　青流
すゝしさを繪にうつしけり嵯峨の竹　芭蕉
年寄をまいてのけたるすゝみかな　七人 畦止
さかさまに蠅とり蜘のすゝみかな　嵐竹
松の香や柵をおろして夕すゝみ　半隠
後に来て立て咄もすゝみかな　園水
蚊虫屑をくらへはつゝられすと荘子の
いひしもさもあらや

蚊のすねをくいて捨てや蚤み　如枫
涼しさやたかくくらゐる杉と杉　可明
杉かけに汗をまーなふ地蔵かな　仲品
すみよしにて
杉涼しところ〳〵の手水桶　安林
近つきの馬てもとるや夕すゝみ　その女
大坂やすゝみすみよし町つき　江戸　鋤立
来た坂を跡めてすゝむ宮行荷持　洒堂
八月廿日住吉の神輿一基宿院の御旅所へ
おしたつる人是をあほきて宣祭の声めでたし

律義なる人ておはあふ御殺かな　青流

即興　東明

夕かほの花の上照る月夜かな
藪の水鶏の遠さかる　聲　青流
わせたかと諸車の相搗を問かけて　之道
なよなかかはらをなをすロあたり　明
坂を一つ越て地道のつくなり　流
笑ひすてして跡のさひしさ　道
蝶つかひはなれかくりし金屏風　明

ぬしあるわはかたらきらせぬ　流
朝の間は水汲ませてかしまし　道
對馬うさきの出たり入たり　明
風吹はきもるやうなる窓をて　流
所詮うき世はおき津しら浪　道
宮て来て紙子つくる草をやき　明
底ぬけ樽と坊の名かたつ　流
自由にも山のなそへに道をつけ　明
いたり細工のはかとりもせす　道
人の出も花見帰りの月のよき　流

名

念佛となへて老をかむ春　道
毎年の節の膳アもきはめ置　明
硯のはたの小銭ちらはふ　流
お内儀のけふもやくはんをおこし　道
狀かそはれは宿もおちつく　明
北風のまた雪になり雨になり　流
用心ふかふ藥もんしやく　道
仕合れはいらぬ道具も付てやり　明
夕筋へたつ小倉若　流

東明にはかた旅たつおとあり巻のすえとつらす

六句吟　萬海

夏の夜や寐水のまんと丸はたか　如枫
とうさかたる虫干の水　青流
藁帙復懐たかくおし入て　海
つくくならふ関の侍　枫
ひつかけて雉子啼る朝の月　流
土筆のたけて芝あをむせ

夏は涼やとまぬく冬は寒を忘くこれ一般
一部に加へて巻之終

行年や天気あかりてふりつゝみ　才磨

夜明の梅の匂ふ冬　咲　青流
田舎酒とりつくろはぬ味噌焼て　半隠
戸をやりわたす大水の棚　麿
暮てゝ楊鷹の藪の月　流
侍の子の扇うち　合　隠
法事幕国上の寺にひらめきて　麿
くたりの帯のよう賣る際　流
物をかく娘かゝ方に打かゝり　隠
火とりのうへに柚釜あたゝめ　麿
鹿の音と奥にきこゆる北は戸の山　流

月のなかるゝ粉川千軒　隱
押分し出るやうや矢の拂物　麿
素縫とけたる脇母子か絹　流
物おもふ暮て鼠にとつかれ　隱
淡竹の中に雨落る音　麿
門ありて花をのほりに比企か谷　流
朝の胡麻の通る岡付　隱
春のうち岩に蛙の軍して　麿
入日のあとのあかき申西　流
いたはしや都へなかす其涙　隱

さかつきまてゝ蓬もまたれす　麿
風まゝに降しこりたる雪の中　流
遥拜所よりみやる神垣　隱
人影のあまたちらつく大小屋　麿
牡丹の畑をつくる鍬の手　流
干に出る帳の匂ひのとゝき包　隱
陳のすまゐのそく足次　麿
食の間に祇園へ參る朝の月　流
そのゆりのちる古君か秋　流
長き夜の燭に焦たゝき袂　隱
　　麿

我吾にのんで酒に崩るゝ　流
下手たけはお出す賽の顯負する　隱
かたなさしても見のぬるめく　賽
中日は一重の花にさらつきて　流
古の雨なりにあたゝまる空　隱

追加

百韻

年頭はかばのとゝめのうつは物　洒堂
陳かなるものとかなる春　青流

三月の峠を後へ出すまして　その女
ひら一面に雪のはなちち　渭川
はりの木のあそちゝに茂り合　流
雪の酒気て明す有明　堂
山崖の屋敷わたる比さむみ　川
ほれて露なる道の高ひく　女
ウ
そよ〳〵と顔のうへふく風落て　堂
真夜にあすの馬さして来る　流
押くへてはゝはと燃る火の明り　女
わつかな町か殿てよふなる　川

諸白は便宜の庭に江戸へ積み　流
無地のはおりにうつ味やる　堂
風炉の茶を一畳敷に佗られて　川女
弓はりちんとのこる涼しさ　堂
すこしある畑の手入もさくけ時　流
奈良海道を右にひち折る　川
冬の日に張子の分か世話になり　女
小宮ひとつは親からのもち　川
こつそりと鳥は巣立し軒の花　流
春もやう〳〵皆になり行　堂

弥生には又とこへやらふいと出　川
大家の庭をとをす草の戸　女
川西は青物ときのほとをすぎ　堂
かりにもうくのたとへひく君　流
声細ふ風のなうする糸薄　女
夜る〳〵降てやさむき月　川
見て通る近江くたりの秋の色　流
紺の物着て嫁かはたらく　川
竈の前月の廿日をかたつける　堂
ちきるみそれも音つる〳〵冬　女

念比に阿闍梨の弟子の導師
先おとなしく留主のつとまる　堂
あたふたと仕立る蚊屋の薄もよぎ　流
蔕のさかりのひろき前栽　女
くつろいて宿の御亭の物かたり　川
火をたくおぶみの膳にちりこむ　流
一はへに淺草表の春わたり　堂
御茶の水近花さかりなり　女
あちこちに囀り立し鳥の声　川
はやる笠着て女中さはつく　堂
　　流

わるにを田植の友のよはり合　女
七つにさかる青雲のそら　川
つら〳〵と柱にうつる藺のにほひ　流
半夏の恩はきらになふなる　堂
言傳をひとり〳〵にあつらへて　川
鮮の家内を名月によふ　女
かけて見る梨は百目につよい程　堂
わすれたやうに野分吹やむ　流
此たひの小あけは関て次てやり　女
落そゝくれし疃なかひく　川

ころ〳〵ところひ次第の宵まとひ　流
談合事は喰ふてはたしぬ　堂
夏夢に土用の風のしみわたり　川
四五年こちにくろむ並　杭　女
兼物て家中の内義ちら〳〵と　堂
あかい鹿子の今にすたらぬ　流
結構な菓子を折々いたゞきて　女
せはき所へつほむ梟　普　請　川
戸明れはいつ比やらの月のよき　流
たふ〳〵堀へよするはつ汐　堂

椎茸のこほるゝ俵引さかし　川
くもりについて日は暮てくる　女
手の内をそ食て通るおもしろさ　堂
三人つれに禪坊のたひ　流
くはり置筵に青茶むしあけて　女
垣の樗に門は寂かゝる　蟲
袴地をよはりてとほる屋形町　流
冬のけしきは亥子ちかつく　堂
冴〳〵と時雨た上の月のかけ　川
入来る銀のすまぬ帳合　女

祖父はゝの孫の若代を大事かり
食喰かけて茉おくるなり　堂
そは〳〵と調ふしなるこひ心　流
ならひ在所に妾しのはす　女
小渡しをぶら〳〵とやる花の雲　川
草むつくりと青むかけろふ　堂
中京もけふは出て来る暖に　女
錫の道具のひかる見せつき　流
そり橋の産敷に向ふ鼠壁　堂
あたりの寺に日中の鳴る　川
名　流

茄子苗雨のしめりにありつきて　女
あしらへかけし莧のあへもの　川
敷紙にときはなたるわ袖共　堂
屋根のあかりの細引をひく　女
とろ〳〵と通りの蹟のさびしくて　流
舩の着場に人をたゝせぬ　堂
三ヶ月の入てのけたるそは畠　川
枝折のそけはあかい鶏頭　流
かたひしと雨戸にさはる秋の風　女
丹波面にわる茶買こむ　川
七

名ウ

着物の上にひつはるひとへ物　堂

山鴨のすくむ日は晩したり　女

ちよろ〳〵と岩の間のながれ行　流

傘さけた尼とつれたつつ　堂

味噌豆をやつと一荷に荷作り　川

風はあれども深川の春　流

引馬のはねによごる花の朝　女

人もうきたつ二月の空　川

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

昭和十三年三月　青字校合了　殿田氏写本ニヨル